

鷗外文学の機構

長谷川

鷗外文学の機構

長谷川 泉

国文学研究叢書

明治書院

著者略歴

大正7年，千葉県に生まれる。
昭和17年，東京大学国文学科卒業。
専攻近代日本文学。
学習院大学講師，医学書院社長。
著書

「近代日本文学評論史」
「近代日本文学思潮史」
「森鷗外論考」正統等鷗外研究7部作
「彩絵硝子の美学」
「川端康成論考」等



国文学研究叢書



鷗外文学の機構

定価 2,200円

昭和54年4月5日 印刷

昭和54年4月10日 発行

著者 長谷川泉

発行者 株式会社明治書院

代表者 三樹彰

印刷者 精文堂印刷株式会社

代表者 西村弥満治

製本所 浦野製本



発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町1-16

郵便番号 101

電話 東京 (03)292-3741(代)

振替口座 東京3-4991番

©1979 Izumi Hasegawa 3391-24918-8305

序

本書は私の森鷗外に関する七冊目の著書である。

既刊の六冊は「森鷗外」(「写真作家伝叢書」2)「森鷗外論考」「続 森鷗外論考」「鷗外『キタ・セクスアリス』考」「続 鷗外『キタ・セクスアリス』考」「鷗外文学の位相」がそれである。いずれも明治書院刊である。

以上の六冊のうち「鷗外『キタ・セクスアリス』考」「続 鷗外『キタ・セクスアリス』考」の二著を除いては増補版が刊行されている。

*

森鷗外に関する研究は、東大文学部国文学科の卒業論文に「美学の影響を受けた日本文学理論の体系と其の展開」を取り扱っていらいのことである。

昭和十七年という卒業年度は、学徒出陣のために、卒業期が半年繰り上げられた。したがって、本来ならば昭和十八年三月に卒業すべきところを、前年の九月に繰り上げられた

ものである。

二年半の課程のなかで卒業論文をまとめることになったわけである。九月の終わりに卒業すると、十月すぐに現役としての陸軍入隊が待ちかまえられていた。「美学の影響を受けた日本文学理論の体系と其の展開」という長たらしい題目の卒業論文は、西周に始まり、鷗外の一部に触れるまでの概観に過ぎなかった。しかし中江篤介訳のウェロン原著「維氏美学」*については、かなり力を入れた記憶がある。

*

とにかく木下杢太郎いうところの「テエベス百門の大都」の一両門への瞥見は、この卒業論文でいちおう果たしたことにほなる。

軍隊から帰ったのち、卒業の日に、東大前の下宿から千葉県の自宅に送っておいた書籍類を横目で見て入隊した思い出のある梱包を解いた。これらの書籍類は、入営の日の朝自宅に着いたものであった。

軍隊から帰ったのち、私は東大文学部の大学院に五年在籍した。当時の旧制大学院は、ほとんど制約がなく、聴講したい講義を勝手に聞き、一年の終わりに研究経過の概要を報告すればよかった。ただ研究発表会があって、教授や大学院学生の前で何か報告をしなればならなかった記憶はある。

私は大学院でも、森鷗外を研究テーマに選んだ。二年の在籍期間は、戦後の混乱のなかで、またたく間に過ぎた。そして一年ごとに延長の特別申請を出して認められ、けっきょく五年間在籍したことになる。ただし、五年以上は居ることができない規定であった。

研究発表も、文芸学に関する事柄と、鷗外に関すること、合計二度ぐらいは行ったと思う。文芸学については、その前衛的問題意識を盛りこんだ記憶が残っている。他の大学院生からは質問もなく、久松潜一教授が暖い批評を加えて下さったことは、今もなお耳染に響いている。

*

学窓を出てから学習院大学・清泉女子大学・東大での講義や演習で森鷗外を取り上げることが比較的多かった。そのことに触発されての森鷗外親炙の成果が、上述の七著を支える血肉となったとも思う。

また森鷗外記念会に関係するようになってから、鷗外関係資料の整理に当たらなければならぬ機会がふえた。また今は亡き森於菟博士や、森家の系族の方々の厚誼をえて、研究の利便を与えられることが多かったことも忘れることができない。

最近では外国の日本近代文学研究者が、鷗外への関心を深めているということがある。トマス・ライマー氏の英文研究書が発刊されただけでなく、リチャード・パウリング氏の英

文研究書も近刊を伝えられており、またトマス・ライマー、デビッド・デイルワース両氏の編訳になる鷗外歴史小説の英訳書が二冊本で刊行されたような機運が醸成されるにいたっていることも、特筆大書すべき事柄である。

*

本年、私は還暦を迎えたが、知友、後進の方々が二冊の記念論文集を編み、その献呈を受けた。編著としては武田勝彦・高橋新太郎両氏がその労をとって下さった。分担執筆の方々のなかには、外国の研究者も加わり、力篇を寄せていただいたことは誠に感謝にたえない。

二冊のうちの一冊が「森鷗外——歴史と文学——」であり、他の一冊は「川端康成——現代の美意識——」である。いずれも明治書院刊である。ここにも森鷗外が大きな位置を占めていることを痛感する。

*

私の森鷗外についての編著は二冊ある。一冊は「現代のエスプリ」(至文堂)の「森鷗外」を書籍版として再刊されたものである。他の一冊は比較文学叢書としての「森鷗外」(朝日出版社)である。

鷗外研究の、新しい道標として求められる領域に比較文学がある。外国文学研究者が多

く開拓の作業をなして来ているが、なお残されている課題の多い領域である。

私の三度に及んだ訪欧の旅では、鷗外のドイツ留学時代の実地踏査の収穫をあげることができなかった。作業仮説は幾つかありながら、なおそれを果たしえないでいる。

*

鷗外は処女の官能を持った青春彷徨のドイツ留学時代ののち、いつの日か再びドイツの土を踏むことを念慮としていた。

しかし、ヨーロッパの記憶が次第に薄れる嗟嘆を洩らしながらも、ついにその機会は永遠に失われてしまった。

鷗外は、側溝に鯉の遊ぶ故郷津和野の地にも、死んで初めて石見人森林太郎として帰還したにすぎなかった。「雁」ならずとも、人の一生は、ままたらぬものである。

*

本書「鷗外文学の機構」は二部からなる。「Ⅰ」はやや概論的な総括である。「Ⅱ」は作品論である。

「Ⅰ」も「Ⅱ」も「鷗外」誌などに発表した論文をもって構成されている。しかし大幅に手入れをしており、新稿に近いものもある。

森鷗外は、私にとって、まだ憑きを感じさせる対象である。

昭和五十三年九月二十三日

初孫誕生の夜、西片文庫において

長谷川
泉

目 次

I

日本の近代化と森鷗外	11
鷗外における仮面と素面の機微	26
鷗外と現代	40

II

うたかたの記	63
仮面	85
金 毘 羅	102
カズイステカ	123
灰 燼	150

I

日本の近代化と森鷗外

森鷗外の生涯は文久二年（一八六二）から大正十一年（一九二二）に及ぶ。もともと、鷗外は明治七年、第一大学区医学校予科入学に際し、規定の年齢不足を補うために二歳の足駄をはいて万延元年（一八六〇）生まれと戸籍詐称をした。ゆえに、東京大学医学部時代も、卒業してからの千住での父の開業の手伝いをするための開業届も、陸軍軍医としての履歴も、すべて万延元年生まれをもっておし通した。二歳のハンディキャップを背負って、なお学友や僚友たちにたいして一歩もひけをとらなかつた。文字通り俊秀であつた。

鷗外の生きた時代は長い鎖国から開国した日本が、新たに西欧の先進国に伍して、馳け足で近代化をはかつた国家的緊急の時代であつた。国としての歴史の歯車は、きしりをたてて先進国に拮抗する富国強兵策をとらざるをえなかつた非常時であつた。広い海をへだてての、東海の一島国としていちおうの平和は保たれたにしても、いつ外威の侵略を蒙るかもしれない危機感、国民の心内に浸透していた。危機感の典型的な手本は、中国大陸にあつた。長期にわたつた日本の文化の師であつた中国

が、欧米の爪牙によって蹂躪される眼前の事象は、冷厳な生きた歴史の教訓として、それから目を蔽うことを許さなかったのである。

明治政府が保身策としてやむなくとった富国強兵策の結果は、日清・日露の両戦役と、さらに第一次世界大戦への参戦という、ほぼ十年を単位とした大戦争へのかかわりとしてあらわれた。前二者の場合には、かかわるといふよりは、まさに当事者として、日本の過去の歴史と国運をかけることになった。帝国主義戦争としての否定面が、今日歴史の史観の中に位置づけられていることもある。しかし、今日、第二次世界大戦と太平洋戦争の敗戦の結末としての日本の存在があるとしても、日清・日露の両戦役の全面的否定は、国民感情の点から違和感がある。日本という国家自体の存立を保証しえたかどうかには疑念が持たれる国民感情のもとに戦われた事実もまた否定しえない。鷗外は、そのような時代に、軍医としての軍人として、また啓蒙的な文学者として、その生涯を送ったのである。

第一次大戦によって、世界は大きく変貌した。世界的な大規模な戦争が、ようやく局地的な戦争のスケールを越えて、さらに近代戦の様相を帯びたからである。その影響力は、社会・政治・経済・文化の各般にわたって、戦争の傷痕を深く残した。日本もその生々しい傷を受けることをまぬがれなかった。世界的な経済恐慌によって、経済のメカニズムは大きく変革され、プロレタリアートの増大は階級対立と社会的な不安を増した。鷗外が親友賀古鶴所にあてた書簡の中で、日本の進むべき途に、国体に基づくコレクティヴィズム（集産主義）を提言したのも、そのような世界的なスケールの変革

の実情を把握し、鷗外なりの予見を持っていたからにはかならない。

鷗外は歌会常磐会を通じて陸軍と政界の大御所である山県有朋と関係を持った。その紐帯は文学的な閑文字を通じてであって、常磐会そのものはあるいはその域を出るものではなかったことが定説として伝えられている。そもそも、鷗外と山県有朋との関係は、井上馨を通じて、その養嗣子である都筑馨六とのパイパスがあった。それに加えるに、親友賀古鶴所の太いパイプがあった。鷗外が自説を枉げることなく陸軍省医務局長の地位を幾度かなげうとうとした際に、陸軍省上層部との宥和をはかって危機を回避したのは山県有朋その人であった。山県が鷗外の才幹を惜しんだのである。

鷗外の陸軍入りは、東大医学部を卒業したのち、直ちに果たされたものではない。当時の陸軍上層部には郷党の先達でもある西周がおり、また軍医本部長をつとめた松本良順（順）や林紀の存在があった。いずれも森家の親戚関係である。鷗外の才能をもってし、かつ、以上のようなひきをもつてすれば、鷗外の陸軍入りは、他の小池正直や賀古鶴所たちのように東大在学中からの依託学生でなくとも、極めて容易なことであったと思われる。しかし、それをきらったのは鷗外自身であった。学友小池正直の軍医本部長石黒忠憲にあてた漢文の上申書がなくても、陸軍入りに障害はなかったはずである。陸軍は富国強兵策の一環として、まさしく人材を求めていたからである。

鷗外が陸軍入りをきらったのは、その本心が文部省の留学生としてドイツ留学を果たしたかったからである。事実、鷗外は医学部長三宅秀にその運動を行っている。それが実現しなかったのは、鷗外

の卒業成績が首席でも次席でもなかったが故である。同級生の主席三浦守治、次席高橋順太郎は、ともに文部省のドイツ留学生に選拔されて、帰国後は東大教授の位置を占めた。鷗外が狙っていたコースである。鷗外の卒業成績が同級生中の八番と、実力以下に評定されたのは、卒業の年に下宿上条の火事でノートを焼いたことと、外人教師シュルツェに睨まれたことと、卒業前水のたまる胸膜炎をわずらったことなどによる。なかでも、シュルツェに睨まれたことは大きい。鷗外は西医の跳梁を怒って、傲岸なドイツ人教師シュルツェに激しいレジスタンスを行ったのである。そこには、すでにドイツ人とドイツ医学に対する鷗外の主体性の確立をかいま見ることが出来る。鷗外の心にきざした近代精神は、師といえども批判せずにはやまない自主独往の精神の覚醒があった。のちに「妄想」で回顧するように「処女のやうな官能」をもって留学の地ドイツに対した鷗外ではあったが、その内奥に燃える不屈の日本魂は、ナシヨナリスト鷗外の本質をはっきりと示しているのである。

*

とにかく、鷗外は陸軍のわくをはみ出ることなく、その全生涯のほとんどすべてを陸軍に投じた。帝室博物館総長・宮内省図書頭・帝国美術院長とその顕官の晩年があるにしてもである。そして、その結果は、山県有朋を通じて日本の政界にある影響を持つことになった。山県への献策は、鷗外が摂取した世界の思想界の動向であり、その動向を踏まえての日本の進路に関する事柄であった。明治の末期から大正にかけての社会的、思想的に蕩揺の大きな転形期に、鷗外のような第一級の智恵袋を持